
最弱な魔法使い

トウクロウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最弱な魔法使い

【Nコード】

N6199Y

【作者名】

トウクロウ

【あらすじ】

魔法使いの名門に生まれたにも関わらず魔法が使えない。そんな少女の物語

決別と出会い（前書き）

新連載です。

二つが連載ものなんて……いけるか？
大丈夫だ。問題ない。

決別と出会い

あれは、確か8歳になった次の日だったと思う。詳しい日は覚えていないが、深夜だったはずだ。

私は、姫島家当主の肩書を持つ父——ひめじま 姫島 げんかく 弦鶴に呼び出されていた。

父は日頃から険しい表情をしていたが、今はその顔に深い皺を刻ませ、さらに。

「どうだ。魔法は使えるようになったか」

外見に伴う威厳のある低い声で、父は私に言葉を投げてきた。

—— 姫島家。

優秀な魔法使いを数多く輩出し、先の戦争では常に前線で戦果を挙げている。国を支える十二家の一角であり、名門中の名門だ。

「い、いえ。まだ初級魔法も使えていません……」

私は父の鋭い視線に挫けそうになりながらも、ただ結果だけを述べる。

そう、私は魔法を使えなかった。

名門の家に産まれて、この事実は笑い話にもならない。魔法使いの性能は遺伝的なもので、優秀な魔法使いの子供ならば優秀でなけ

ればならない。この家にとって私は異常だった。兄や姉、弟や妹も魔法は使えるし、双子の妹も魔法を軽々と使える。いずれも才能を開花させていた。

私はと言うと、魔法が使えないために家に閉じ込められていた。朝起きた時から魔法を扱うための勉強、訓練をして、それで一日が終わる。物心ついた時からその生活だったので、外の世界の事など書物で集めた知識しか知らない。

私の言葉を聞いていた父は、その表情を失望の色に変えていった。

「……そうか。なら、この家を出ていかなければならない」

「……はい」

8歳までに魔法を使えないようであれば家を出る。私が6歳の時、父から告げられた言葉だった。

一般家庭ならまだしも、名門に産まれてこの様だ。私の存在を世間が認知すれば、叩かれるのは目に見えている。そうなれば、姫島家の立場は危うくなるだろう。十二家は実力が伴う家を選ばれるので、その地位を狙っている者も少なくない。そういう者は十二家の落ち度を探そうと躍起になっている。

「お前は、昔から頭だけは良かったからな。理解してくれと思うていたぞ」

父の言うとおり理解はしていた。父は軽蔑の視線をこちらに向けしており、厄介払いをしたいことは。

「さあ、この家から出て行け。金は渡しておこう」

お札が入っているのだろう。封筒を懐から出した父は、私にも触れるのも汚らわしいように封筒を投げる。魔法を使っているのか、その封筒は私の足元に落ちた。それを手に取って深く頭を下げる。

「……今まで、お世話になりました」

別に、悲しいとか辛いなどの感情はなかった。この家には私の居場所はなかったのだから、逆に少しすっきりした気分だ。

父はすでに私に興味はないのか、早々と部屋を出て行った。

私はこの家を出ていくとしよう。

裏口から外に出て、当てもなく歩き続ける。持っているのはお金だけだ。姫島家と知られてはいけけないので、何かを持っていくのは禁止された。裏口から出たのも目立たないためだ。

雪が降っており、アスファルトの上に積もっていた。歩くたびにシャリと音が鳴り、靴の中を冷たくしていく。

高級住宅街を抜けて街に出た。人通りは少ないが、それでもこの時間では多いほうだろう。カップルと酔った大人をぽつぽつと見かける。比較的明るく、いくつかの店は営業中だとわかった。

そこで何か買えば良かったのだろう。しかし、どの店に入れば良いか分からなかったし、そもそもお金を使い方さえ知らなかった。

フラフラと体を動かしながら歩き続ける。すでに体力は限界だった。8歳が過ぎすには気温が低すぎる。疲れと寒さにより思考判断は鈍り、自覚はなかったが家を追い出されたことにより、精神的にも疲弊をしていた。

自分がどこを歩いているのかも分からないし、足を動かしているのかも認識できない。焦点が合わず、目の前に何があるのかもわからない。

私は何もわからない。

微弱な衝撃と共に、肌を刺すような冷気を感じた。そうしてやっと視界が戻ってくる。どうやら私は倒れたらしい。

瞳に映ったのは少し汚れた雪だった。その雪が口に入ってくるが、それを吐き出す気力も残っていない。

もう、死ぬのかな。

漠然とそう思った。怖くはない。いや、恐怖を感じないほどに疲れていた。

急激な眠気が体を襲い、私は本能に従うように瞼を閉じようとする。

る。

——その時だった。

「ほう、日本でもこのような光景を目にすると、この国も腐ったものだ」

凜とした声が鼓膜を震わした。声の主はどうやら私のすぐ傍にいるみたいだが、生憎眼球が動いてくれない。だが、瞼は再びゆくりと開いていく。

「ガキ、貴様は運が良い。この私に拾われるのだから。感謝しろよ。ちなみ、私がこんな善意を出すのは機嫌が良い時だけだ。よく覚えておけ」

冷たくて鉛みたいに重かった体が、ふわりと浮いた。持ち上げたのだろう。お姫様抱っこされたと気付いたのは、もう少し後になってからだ。

そして、“彼女”は私の顔を覗き込んできた。その顔は美しく、猫のように細い目が良く似合う。瞳は左右が違う色で、右が琥珀色、左が赤銅色だ。艶のある白銀の髪が私の顔にかかる。

「私の名前は黒沼格だ。^{くろぬまいたる}ガキ、貴様の名前を聞こう」

それが私——^{かなで}姫島奏と“彼女”との出会いだった。

決別と出会い（後書き）

小説を一人でも多くの人に読んでもらえたら嬉しいです。
感想や誤字の指摘などもよろしくお願いします。

きつかけと結果（前書き）

文章がしょぼい……。

他のユーザさんみたいに上手に書きたいです。

きっかけと結果

この世界に魔法の存在が確認されて、すでに100年以上が過ぎた。

きっかけは、世界各国で起こった現象からだ。ある日、世界中に黒いオーロラが同じタイミングで発生した。その漆黒にも勝る色は太陽や月の明かりを遮り、この青い惑星を闇に変えた。人々は「世界の終焉だ！」と叫んだ。まあ気持ちは分かる。しかし、オーロラは数分後には消滅し、世界は元の色彩を取り戻す。この事実は数時間で世界に伝わり、学者や宗教などの様々な人が自論を唱えていた。今考えると少し滑稽だ。

数日後、今度は原因不明の発熱が世界中に広がった。政府は黒いオーロラと発熱は関連性があるとして調査を始めるが、手がかりの尻尾も掴めない。とりあえず、患者を隔離する方法しか思いつかなかったようだ。感染する病気の可能性もあったからだろう。だが、その努力は実ることはなく、世界の9割の人が発熱の症状を訴えた。交通や生活ライン、流通などが停止し、このままでは大規模な死者が出る可能性が浮上する。

さらに数日経ったある日、意外な展開となった。今まで発熱で寝込んでいた者が、一気に回復に向かったのだ。不思議な能力に目覚めて……。

ある者は指先から火を出し、ある者は何もない空間から水を作り出した。個人差はあるが、発熱した者は何らかの能力に目覚めていたのだ。本人たち曰く、「何となく出来る気がした」と言う。魔法の始まりだ。世界中の人々がタネも仕掛けもない超常現象を起こして

いたので、魔法の存在は爆発的に世間に広まる。しかし、新しい技術は悪用されるのが世の常。

魔法が認識されて数週間後、世界は戦火に包まれていた。魔法を軍事に取り込んだ国々が他国に侵略を開始。第3次世界大戦が勃発したのだ。各国も急いで魔法中心の部隊を構成、迎撃をするための態勢を整えた。

戦争と同時に、様々な国が魔法の研究を行う。いくら便利な力と言っても、その存在は不安定なものだ。原理は？発生条件は？

研究の過程で解明されたのは以下の通り。

- 1・魔法を使える者と使えない者がおり、発熱がきっかけで魔法が使えるようになるらしい。
- 2・魔法を使える者には魔力が宿り、魔力を媒体として魔法を使える。この魔力の容量には個人差がある。原則的に、魔力を多く消費すると魔法の威力は比例することが確認された。
- 3・魔力の最大容量は訓練しても増加することはない。が、減少することもない。
- 4・ファンタジーに良くある詠唱はない。しかし、魔法はイメージによって攻撃力、構成スピードが上がるので、各自イメージしやすい詠唱で魔法を使うことが望ましい。

など、大まかに言ってこんな具合だろう。早い話が才能によって大きく左右されると言うことだ。

20年続いた大戦は、アメリカを中心とした国連軍が勝利を収める。

日本国は国連軍に所属しており、最前線で活躍したのを評価された。その活躍を支えたのが十二家だ。日本国はその後の国際社会で有利な地位を築く。

「学校？」

長い黒髪を首の後ろで纏めた少女が、疑問符を浮かべながら振り向いた。

少女は左目に髪と同じ色の眼帯を付けており、右目の瞳も漆黒と言って良いほど染まっている。顔のパーツがバランスよく配置されており、美少女と言っても過言ではない。しかし、凛と上がった目尻が目付きを悪くしており、170センチの身長も相成って少し威圧感を感じる。一言で表すと「クールな美少女」だ。

その少女の視線の先には、木で作られた椅子に座っている絶世の美女がいた。

オッドアイの瞳が少女をじっと見つめる。プラチナブロンドの髪が窓から入ってきた朝日を反射し、まるで美女の周りを天使が踊っているようだ。色気がある顔の造詣は同性でも見とれてしまい、グラマーな体格は男達の視線を釘付けにするだろう。

黒沼格。

数年前の冬。死にかけた少女を拾い、以後ずっと面倒を見てきた女性だ。

格はそのふつくらと唇を妖艶に動かす。

「ああ。ちなみに、もう手続きはしておいてある」

女性に耐性のない男性ならば、その艶やかな声だけで腰が砕けてしまっただろう。ただし、口調は女性らしいとは言えないが。

「また事後報告……」

「そう言っな。私の性格は知っているだろう？」

げんなりとする少女——黒沼奏を見て、格はくつくつと妖しく笑った。

「……うん」

ため息混じりに頷いた奏は、テーブルの上に出来上がった料理を乗せていく。

「おお、今日の朝食はスクランブルエッグか。グッジョブだ！—さすが私の“娘”だな」

「“母さん”が生活力ゼロの性格破綻者だからね」

「くっ、言っようになったなあ」

「母さんの娘ですから」

取り留めのない話をしながら、奏は格の向かい側の椅子に座る。

「拾ったときは従順で可愛かったのにな」

「はいはい。さっ、食べるよ」

中々ひどい扱い方だったが、格はそれなんとも思っていないのか、二人で「いただきまーす」と言って箸を手を取った。

「で、話の続き何だけど」

「ん？……………ごくん。ああ、学校の件か。ちゃんと理由はある」

白ご飯を口に含んでいた格は、たっぷりと時間をかけて飲み込む。

「聞いて驚け！貴様の入学する学校は、何と世界最高峰の教師、生徒、設備がある“皇総合魔法学園”だ」

「……………は？」

ニタリと笑う母とは対照的に、娘はスクランブルエッグを食べようと口を開けた状態で固まった。

きっかけと結果（後書き）

お気に入り登録ありがとうございます！
もう感動しました。

感想・誤字などの指摘をお待ちしています。

母と娘（前書き）

三日連続更新です。

がんばった！

母と娘

「ちよつ、ちよつと待って！」

私は思わず立ち上がった。母さんは未だにドヤ顔で、未だにニヤニヤ笑っている。

……ちよつと殴りたい。

「す、皇総合魔法学園って、あの超エリート学園でしょ！私が入れるわけないじゃない。しかも理由をまだ言っていない！！」

——皇総合魔法学園。

日本のある離島に作られた、魔法使い育成を目的とした学園だ。島の半分は学園の敷地で、小学校、中学校、高等学校、大学、寮、研究施設などが建てられている。島の残りの敷地は、ショッピングモールなどの娯楽施設が立ち並び、学生たちや観光客で賑わっているらしい。

学園には優秀な教師が揃っており、全て学長がスカウトしてきたという噂がある。教師陣は十二家出身の者や元魔法部隊に所属していた軍人、魔法研究施設に勤務していた科学者など様々な職種、人種が勤めている。生徒の方は、かなり難しい試験を合格した者だけで、20人に1人程度しか受からない超のつくエリートだ。その合格率で運営が上手く行くのか？と疑問が出るが、毎年世界中から受験生が来るので問題はないだろう。

基本的には魔法を中心とした学園なのだが、普通の授業や部活も

やっており、特に運動部が盛んだった。学校行事なども豊富で、それ目当ての観光客も少なくない。

それでも、魔法使いの中でも超エリートが行く学園なのだ。私も初級魔法なら使えるようになったが、入学するには明らかに無謀だった。

「理由なら2つある。まず1つ目、これは依頼だ」

先程の不敵な笑いを消し、母さんは急に真剣な表情で話し始めた。仕事をしている時の顔だ。

そんな母さんの態度に私は落ち着きを取り戻し、再び椅子に腰掛ける。

「仕事なの？」

「ああ。最近、十二家の勢力図が変わりそうだな。十二家の連中は他の家を没落させようと必死だ。内輪で争って何とも滑稽だが、そうするとハイエナ共が群がってくるだろう？無能な奴らが虎視眈々と、十二家に入ろうと狙っているわけだ。そこで貴様には学園に入ってもらい、十二家連中の馬鹿息子と馬鹿娘を狙うハイエナ共から護衛してもらう」

母さんは淡々と説明すると、何もない空間からクリアファイルを取り出して私の目の前に置いた。私はパラリとファイルを開き、さっと目を通す。……って

「あの……護衛対象は何人でしょうか？」

「何で敬語なんだ。護衛対象は十二家出身の奴らで、学園に所属している奴ら全員だ。30人ほどだったか？」

——はあ！？

「いやいや無理！ぜつつつたいに無理！！いくらなんでも多すぎるって！そんなに体が別れるか！某忍者漫画みたいに影分身使えってか！それに教師も混じってんじゃん！大人だったら自分の身は自分で守りんしゃい！！」

「H A H A H A、キャラが崩壊してるぞ。ボブは相変わらず面白い反応をしてくれるな」

「笑うな！って言うかボブって誰！？」

中学校の英語の教科書に出てくる外国人か！

とりあえず、深呼吸深呼吸。

す〜は〜、す〜は〜……。

「ひっひっふう〜、ひっひっふう〜」

「はいそこ茶化さない」

「ちっ、もう冷静になったか」

つまらなそうな顔になった母さんは、パクリと白ご飯を口に含む。

「もぐもぐ……ごくんっ。護衛対象の詳細はそれに書いてあるから、

ちゃんと目を通しておけよ。次に2つ目。どちらかと言えば、私としてはこっちが本題だ」

母さんはそう言うのと、いつもでは考えられないほどの優しい瞳で私を見てきた。

「この8年間で、貴様はずいぶん人間らしくなった。だがな、貴様には相談をする友人がいないし、普通とはかけ離れた人生を歩んでいる。はつきり言って達観しすぎだ。まだ16歳なんだし、一回は学生気分を味わっても良いと思ってな」

先程とは打って変わって、優しい声で母さんは語りかけてくる。再び空中から何かを取り出すと、そっと私の手に握らせた。

「これが飛行機チケットだ。一応3日後だから、準備は間に合うだろ」

「母さん……」

私は少し潤んでしまった目で、育て親をこの瞳に映す。そんな私の様子を見た母さんが、思わず苦笑した。

「くっはは、何だその顔は。“黒い氷”の名が泣くぞ」

「いくらで雇われたんですか？」

「なっ！？おい！！」

「あははははははははは！！」

ああ、こんな時に素直に感謝出来ない心が憎らしい。

本当は、感謝だけでは足りないほどに救われているのに。

―― 3日後。

「そろそろ時間だな」

母さんがポツリと言った。

空港内では多くの人が行き交い、様々な声が混じって鼓膜に不快感を与えてくる。

私はキャリーバックを手に持ち、プラスチックの椅子から立ち上がった。

「そうだね。もう行かないと」

今でも母さんの元を離れるのは少し寂しい。でも、これは母さんがくれたチャンスだ。私は任務をこなしつつ、学園生活を出来るだけ楽しむことに決めた。

「あんまり、しつこいのは私のキャラじゃないな。ここで見送るところにしよう」

隣に座っていた母さんも立ち上がり、私の体を少し強く抱きしめる。

「えっ？ちよ——」

思わず顔が赤くなるのが分かった。こんなことは姫島家の頃も、黒沼として生きてきた今までも経験がなかったからだ。

「しっかりやってこい」

耳元で、いつもの凜とした声で、それでも温かくなる声質でそう言ってくれた。

私も母さんの背中に腕を回し、きゅっと抱きしめる。

「うん。行ってきます」

周りの人になんか注目されていたけど、心が温かくなったのでよししよう。

母と娘（後書き）

感想・誤字などの指摘を待ってます。

親バカと感謝　ゝ黒沼格ゝ（前書き）

今回は格さん視点で書いてみました。

親バカと感謝　〜黒沼格〜

side 黒沼格

少しずつ遠ざかっていく飛行機を、私は管制塔の屋根の上で煙草を吸いながら眺めていた。吐いた白い煙が頼りなく中を舞い、蒼空と徐々に同化していく。

「やはり、少しは寂しいものだな」

私は思わず呟いた。

振り返ってみると、この8年間は今までの人生の中で楽しかった。一日一日が昨日とは違う面白みがあり、幸福感や充実感に包まれている。

まさか、ただの気まぐれで拾ったガキが、こんなにも心の中で大きくなるとは思っていなかった。

「まったく、私も親バカになったもんだ。あいつが1人で生活するのに、こんなに不安になるとは」

くつくつく、と私は声を出して笑う。少し、声が震えていたかもしれない。それほど心配と言うことだろう。

と、後方に気配を感じた。

「こんなところにいましたか。探しましたよ」

「“レム”か……」

私の数少ない理解者であり、仕事仲間でもある。奏のことでも色々世話になった。振り向いてないので顔は分からないが、レムは微笑んでいるだろう。

「貴女のそんな顔を見る日が来るだなんて、お互い長生きしてみるものですね」

「ほっとけ」

私の照れ隠しが伝わったのか、レムはクスリと笑う。

「素直じゃありませんね、相変わらず。それに……本当はついに行きたかったんでしょ？」

いつものように、こちらの思考を見透かすような言葉を投げかけてくる。私は自嘲気味に口を歪ませた。

「まあ、な。でも、私がいたらアイツは気を使っただろうし、一度ぐらいは母親らしくしてみたいんだ。この仕事が終わったら、アイツはまた裏社会に身を投じることになるからな。あと、アイツはそこらにいる奴らより優秀だ。きっと誰にも好かれる」

「……本当に親バカですね」

「ああ。今更だろ？」

「そうですね。奏ちゃんが依頼に失敗して傷だらけで帰ってきたとき、貴女はすぐ様に仕返しに行きました」

レムは少し呆れが混じった声色でそう言った。そんな態度に少しムツとする。

「“自分の娘”が可愛くない奴などいない」

「本気でまるくなりましたね。奏ちゃんに、今の貴女を見せてやりたいですよ」

レムはため息を吐きながら、何かごそごそとやっている。そして、私の目の前に一通の封筒が浮いてきた。

「奏ちゃんから預かったものです」

奏が？

少しの動揺が胸をかすめるが、それを押し殺して封筒を手取る。

——中には、札束と手紙が入っていた。

「これは……」

まず、札束を手取る。間違いない。8年前、奏が家から追い出された時に持っていたものだ。ちよつと懐かしくて頬が緩んでしまう。次に手紙を手に取り、娘からの文章をゆっくりと読む

『母さんへ』

急に驚いたかな？直接渡すのはちょっと恥ずかしいから、レムさんに頼んだの。

正直にお礼出来なくてごめんね。学園にいけると聞いた時、本当に嬉しかったよ。ありがとうね。

ありがとうの言葉だけじゃ感謝の気持ちは足りないけど、依頼を達成して帰ってきたらもっと伝えるから。覚悟しといて。

一緒に入れたお金は、母さんが持つて。勝手に使ったらダメだからね。私と母さんの出会った日の思い出の品なんだから。

じゃあ、心配は必要ないとは思うけど、体に気をつけてね。

追記：母さんとは血は繋がっていないけど、私にとっては本当の母さんだよ

あなたの娘より』

「親子揃って素直じゃないんですね」

私の涙を見たレムが、柔らかい声で言った。

——私の娘を乗せた飛行機は、エンジン音すら聞こえなくなっていた。

親バカと感謝　ゝ黒沼格ゝ（後書き）

あれえ？こんなに良い人にするつもりなかったのに……。

感想・誤字の指摘など待ってます。

こんな拙い文章を見てくださってありがとうございます。

学園と門（前書き）

最近、寒くなりました。

さむっ！

というわけで5話目です。

学園と門

「……でっか」

8時間ほど空の旅を満喫した私は、太陽が垂直になる直前に皇総合魔法学園の正門前にいた。

鉄の門の横幅は大型トラックが2台並んでも余裕がありそうで、高さは私の10人分ぐらいあるだろうか。敷地の境界線を表している煉瓦の壁は、門よりも高く、左右に広がっている。監視カメラが所々に設置しており、門番が門の向こうでこちらに睨みを利かせていた。

「それに魔法障壁と赤外線、対空用の魔法まで空に展開しているなんて……ずいぶんと厳重な警備ね」

私でも感知出来るほどの魔法だ。相当な魔力を込めているのだろう。赤外線や監視カメラは匠に隠してあるが、これは経験の上で気づいた。

ぼーっと突っ立っていても仕方がないので、とりあえず門番に話しかけようと思う。

第一村人発見！とな。

「あの――」

ガコンと鈍い音を立てて、重厚そうな門が左右にゆっくりと開いていく。

ええ、私話しかける直前だったんですけど。このところ営業スマイル全開の顔はどうすれば？

ぎぎぎつと軋むような動きで顔を無表情に戻す。

「……」

さて、これは歓迎されている証拠なのだろうか？門番は相変わらずこちらを睨んで、今にも魔法を放ってきそうだ。

怖いので、ちょっと様子を見ることにした。

—— 5分経過。

状況に変化なし。

—— 10分経過。

門は開いたまま。門番は睨んだまま。私は立ったまま。

—— 15分経過。

門は開いたまま。門番は以下略。

—— 20分経過。

門は以下同文。

—— 25分

「って、待ってられるか——い!!」

春の陽気に当てられるのも気持ちいいが、すでに太陽は頭の上に到達していて少し暑い。

この状況に耐え切れなくなった私は、風を切るように走って門を潜った。若干門番にひやひやしたが、門番は変わらない眼光で見守っていてくれる。

えっ？あの目つきがデフォルメなの？

門を通過し、桜の並木道を通り過ぎた私は、綺麗に清掃された石畳の上を歩いていった。どうやら、この石畳は学園のど真ん中を走っているらしい。右には小学校区画、左には中学校区画が広がっており、子供たちの喧騒がすごい。あと、魔法の起動音と破裂音がドッコンドッコン聞こえてきた。さすが魔法学園。喧嘩も想像を絶する。

学園の区画の間は、障壁で区切られており、決められたところからしか出入りが出来なくなっていた。

「本当にすごい設備。私の護衛は必要なのかな」

正直に言つて、この学園の守りを崩すには軍隊が必要だ。それでも、何日かは籠城できるだろう。内部も何かあったら警報が鳴るようになっていいるし、警備員が一定間隔で巡回している。だが――

「逆にきな臭い」

まるで、ここには大切な何かを隠しているかのような念の入れ方だ。それとも、ただ単に生徒を心配しているだけか。

「っと、そんなことはどうでもいいか。仕事に集中集中」

仕事に害がなかったら、それでいいかな。あまり首を突っ込まな

いほうが良いかも。

それからしばらく歩いていると、ようやく高校区画が見えてきた。その向かい側に建っているのが大学区画だろう。

「……広すぎ」

昔、母さんから貰った腕時計を見ると、門を抜けて20分は経っていた。

少しだるくなった両足を動かし、高校の正門に近づく。20分前に見た門と同じように、ある程度距離が縮まったところで開いた。

「私は学習する」

鼻でフンツと笑い、高校区画に足を片方入れた。

「止まってください!!」

あれー？

皇総合魔法学園の中学校、高校、大学には風紀委員会が存在している。その名の通り、生徒の風紀を守っているわけだ。ただ、魔法中心の学園なので魔法によるトラブルが多い。そこで風紀委員会の生徒は、この学園の中でも優秀な者が所属している。

基本活動は区画間の生徒監視、校内パトロールなど面倒なものばかりだ。

当初は各区画で独自に活動していたが、学校行事などで連携ミスが目立ち、その対処法として委員会是一本化された。この連携ミスはほとんどの委員会であつたので、今では一本化されたものが多い。

「……ふう」

少女は肺の中の空気を換えるように、軽く息を吐いた。

高校の正門にすぐ横にある詰所に少女は座っており、気の抜けた様子で門を見つめている。腕に巻かれた腕章は、風紀委員の“風”が装飾されていた。微かに春の風が少女の茶髪を撫で、徐々に眠気を誘ってくる。

「だれもない……」

少女は風紀委員の仕事でも一番暇な仕事、区画間の生徒監視をやっていた。

通常、別の区画に行くためには、許可書を各区画の事務室から貰わなければならない。それを詰所にいる風紀委員に渡すことで、移

動の許可を得ることができる。門は自動ドアと似て勝手に開くのだが、風紀委員が詰所で見ているので違反をする生徒は少ない。ようは、とても楽な仕事なのだ。

少女は春特有の暖かい気温に、こくりこくりと船を漕ぎだした。

ピーーーーー。

もう夢の旅に飛び立とうとしていた時、違反者が出た合図である電子音が詰め所に鳴る。

「っ！」

一瞬で目を覚ました少女は、壁にかけたあつたロッドを手につかんだ。

「フェン」

少女が短く詠唱すると魔法陣が空中に浮かび、次の瞬間には正門に移動していた。彼女の目の前には黒髪の少女が校内に入ろうとしており、学園指定の制服を着てないのを見た茶髪の少女は、不審者と判断しロッドを突きつける。

「止まってください!!」

学園と門（後書き）

やっと学園のキャラクターを出せました。

バトル描写とかやりたいです。へたですけど……。

こんな駄文を見てくださってありがとうございます。

感想・誤字などの指摘を待っています。

高校区間と武器（前書き）

最近、私生活が忙しくなってきました。
更新スピードは落ちるかもしれませんが。

就職活動やらテストや卒業研究やら、殺す気か！

高校区間と武器

「す、すみませんすみません！」

「あゝ……大丈夫だから。あんまり気にしないで」

茶髪の女の子が、私に向って一生懸命に腰を折って謝っていた。ふんわりとした長髪が、風と踊るように揺れる。

高校区画に入った途端に、私は目の前の少女に連行された。連行場所は正門のすぐ近くで、さながら詰所と言った所だろう。教師に連絡しようとする少女を必至で止め、30分ぐらい説得した。新品の学生証を見せ、先ほど納得してもらったばかりだ。

頭を下げる彼女があまりにも不憫で、私は気にしていないアピールでヒラヒラと手を振る。そんな態度に女の子は、ほっと安堵した表情をした。

かわいいなあゝ。

女の私でもそう思う可憐さだ。肌にはシミ一つなく、まるで陶器のように透明感がある。眼はクリンと大きく、少し小柄な体型に良く似合ってた。まあ、間違いなく日本人ではないだろう。瞳が少しグレーがかってるし。

私は荷物を手に取った。

「じゃあ、私はそろそろ行くから」

「あつ、待つてください!」

えっ、まだ何か?

女の子は申し訳なさそうに、上目使いにこちらを見つめてきた。
これで落ちない男はいない。たぶん。

「あ、あの……案内させてくれませんか?色々迷惑をかけてしまつたし、そろそろ交代の時間ですので」

ラッキー。

やはり、これからの護衛任務をするとなれば、学園の地形を細かく頭に入れておく必要がある。後で本格的に回るが、今から軽く調査するのもあるくないだろう。それに、向こうから言ってくるとは都合が良い。

「うん、願ってもないことだよ。お願いね」

私がそう言つと、女の子はぱあつと顔を明るくして「ありがとうございます!」とお礼を言ってきた。お礼を言うのはこちら何だけど。

しばらくしてきた別の風紀委員の子に後を任せ、私と女の子は連れ立って歩き出す。

「まず、荷物を置きたいですね。寮の方へ案内します」

ニコリと笑う少女は、きつと男子たちにモテモテだろう。少女が先に歩き、その少し後ろを私が付いていく。

——
月上 つきかみ 緋乃夜 ひのよ。

私はこの少女の名前を知っていた。別に月上が名乗ったわけではない。月上という苗字は十二家に所属している家の名前であり、私の護衛対象の一人だ。

利用したみたいで少し心苦しいが、これも仕事だ。汚い方法はやりなれている。

——それでも、呼吸が苦しくなるような感覚は慣れない。

「……疲れた」

私は月上の案内を終えて、寮の部屋にいた。

えっ、展開が早いつて？ちっちゃいことは気にするな。それワカ……これ以上は駄目かな。

ちなみに、大まかな施設の場所はこんな感じ

右————グラウンド、体育館、室内プール、模擬・魔法練習場、など体を動かす施設。

中央の下——男子寮。

中央の真ん中——H型の校舎

中央の上——女子寮。

左——文化部の部室棟、闘技場。

と、こんな感じだ。

闘技場なんて何に使う気なんだろう。

ベットにすくとんと座り、眼下にある複数の段ボールと刀に視線を向ける。

私の寮の部屋はこの318号室だ。ベットやタンス、冷蔵庫、机とそれに付属する椅子は標準で置いてある。簡易キッチン、シャワーやトイレもあり、シャワーとトイレは別。一部屋しかないが、こちらのマンションよりも絶対広い。しかも一人部屋。なんて贅沢。

今日は一日中歩きつ放しだったので疲労は溜まっているが、明日からの活動のため荷物を整理しよう。

ほとんどの荷物は宅配便で送ったので、手持ちはキャリーバック一つでだったが、こうみると案外多い。

黒い鞘に収めている刀を手に取り、少し魔力を込めてみる。すると、刀はみるみる変形を始め、黒い十字架のネックレスに姿を変えた。この刀には格の魔力が定着されていて、私の魔力だけを感じしで形を変えるようになっていた。普通、魔法を自分とは違う物体に

定着させるのは、数人がかりの高ランク魔法使いで行う。

ネックレスを首にかけ、次に一番小さい段ボールを引き寄せる。段ボールは見た目と反してずっしりと重い。段ボールより一回り小さい金属のケースが入っており、その鍵穴にネックレスの十字架を差し込んだ。カキンと乾いた音が鳴った。次はケースを開けると、そこには分解された鉄のパーツがある。パーツを手に取り、いつもと同じように組み立てていく。

20秒ほどで組み立てたものは“デザートイーグル”だ。自動拳銃の中ではかなりの重量級に入るが、その威力は世界成功。反動はかなりのものだが、これは日頃の訓練と慣れで克服した。

別の段ボールからホルスターを取り出し、デザートイーグルをそれに納めて直に胴体に巻きつけた。

「よっ、と」

革のひんやりとした冷たさが、少し気持ちいい。

窓から外を見ると、空はすでに赤く染まっていた。学園の調査はまた明日にしよう。こんなに警備が厳しかったら相手も簡単には手は出せないし、何より疲れた体での仕事は危険だ。

私はふかふかのベットに潜り込み、その意識はすぐに闇の向こうに消えていった。

高校区間と武器（後書き）

感想・誤字の指摘など待っています。

銃と刀って男のロマンですよ。

奇襲と校長（前書き）

久しぶりの更新です。

奇襲と校長

次の日、私は『校長室』というプレートが嵌めてあるドアの前にいた。

理由は至って単純。母さんと高校区画の校長が昔からの友人で、私がこの学園に編入出来たのも校長が手続きしてくれたらしい。

ぶっちゃけ職権乱用。

この事実を知っているのは私と母さん、高校区画の校長と副校長らしい。学園トップの学長や理事長には秘密とのことだ。大丈夫かな？

『まあ、危険を冒して協力してくれているのだから、挨拶ぐらいはしておけ』と母さんが言っていたので、昨日の内にアポを取って来たわけだ。

「ふう」と軽く息を吐き、ノックを二回する。すかさず「どうぞ」と聞こえてきたので、音もなくドアを開けて中に入った。

「失礼しま——」

微弱な魔力を感じた。

とつさに横に跳ぶと、先程までいた場所が蒼い炎に包まれている。

服の中に手を入れて拳銃を取り出し、その場にいるもう一人に向けて発砲した。

——パシユ。

デザートイーグルにしてはかなり小さな発砲音だろう。それもそのはずで、この拳銃は私が試行錯誤して改造した特別製だ。サイレンサー並の発砲音と、さらに速度を増した弾速。さらに母さんが改良した弾や、魔法関連のものが込めてある。

相手は私の急な発砲に驚いたのか、少し慌てた様子でその弾丸を火球で弾き落とした。しかし、遅い。

相手が火球を放った時、私はすでにそいつの懐にいた。腕をがっしりと？み、体を反転して相手を背中に乗せる。

「はっ！」

いわゆる一本背負いだ。気合いの声を出して、思いっきり相手を絨毯の上に叩きつける。

「むっ！？」

絨毯と言っても少しは痛いのか、相手は僅かに顔を顰めた。

私はネックレスに手を添える。

「汝、我との契約を果たせ」

詠唱というより発動キーの言葉を紡ぐ。ネックレスが形を変え、昨日とは逆に黒い刀になった。そしてそのまま、切っ先を相手の喉に突き付ける。

「いくら校長と言っても、生徒相手に奇襲は駄目でしょう」

私がそう言うと、相手——校長は苦笑をした。

「ごめんなさいね。でも、貴方は書類上っただけでしょう?」

校長はその綺麗な顔を私に近付けると、悪戯が成功した子供のように笑う。今確信した。この人はそうとう厄介な人だ。カモセーブしていたし、頭もかなり切れるだろう。

拳銃をホルスターにしまって刀をネックレスに戻した私は、校長に向けて手を向ける。“彼女”は私の差し出した手を握り、立ち上がって校長の椅子にドカツと勢い良く座った。

「では、改めて自己紹介しましょう。私は紅色^{べにいろ}ホタル。皇総合魔法学園の高校区画の校長をしているわ。よろしく」

「黒沼奏です。今回は学校の手続きなど、ありがとございます」

「いいのよ。こっちだってそれなりの対価は貰っているから」

校長はそう言うと、くつくつと笑う。その様子が少し母さんに似ていた。

「それにしても、うん。奏ちゃんは合格ね」

「合格?」

「そう。あつ、座っていいよ」

校長は純白のソファーと指さしたので、ありがたく座らせてもらう。何これ、めっちゃうちゃ気持ちいい。

「一応学園側を騙しているんだから、護衛につく人は出来るだけ優秀な人間が良いじゃない？でも、格からの連絡は『魔法を使えない人間』って言うから、もう不安になっちゃったの。それで奇襲をかけて試したのよ」

試したって……

「最初の炎は規模は小さいですが、かなり高度な魔法ですよね。もし、私が避けきれなかったらどうしたんですか？」

火のイメージは一般的には赤い火だろう。だが、赤い火は酸素を有効活用出来ていない。そのせいで一酸化炭素などの有害物質が出来るが、蒼い火は酸素供給量が十分で、効率良く燃えている証拠だ。なので赤よりも蒼の方が高温。魔法で蒼い火を発生させるのは、S級の高度なランクに分類される。

私がああ魔法を回避できなかったら、絶命していただろう。

「どうしたと思う？」

校長は微笑んで、可愛らしく頭を傾げた。炎と同じ、蒼いショートカットの髪がふわりと動く。

「……」

やはり、この人はやばい。冷静な人柄に見えるが、その中身はな

にもかかも燃やす炎だ。おそらく、自分に害をもたらす人間がいたら、彼女は容赦なく殺してしまうはずだ。

私はニコリと営業スマイルをして、校長の静かな重圧を無視する。

「さあ？わかりませんね」

その答えに校長は重圧を消し、嬉しそうに表情を崩した。

「やっぱり格が自慢する娘ね。実力も判断能力も申し分ないし、あの格が丸くなるほどだから性格もいいでしょ」

校長はデスクの引き出しから、一枚の紙を取り出した。

「黒沼奏さん。貴方を正式に編入することを許可します」

デスクの上にあった判子を手に取り、朱肉をつけて紙に押し付けた。

「魔法の素質がほとんどないからFクラスになるけど、これは仕方のないことだから諦めてね。制服とか教科書は寮の部屋に送っておくから。始業式は4月8日だから忘れないで」

ついさっきまでの威圧感はなく、テキパキと伝えてくる姿は『出来る女』と言ったようで少し格好いい。

「——とまあこんな所かな？何か困ったことがあったら言ってね。何だか、貴方のことに気に入っちゃった。あと校長先生とか呼ばないで、名前で呼んでね」

「は、はい。分かりました」

こちらを見つめてくる校長、じゃなくて紅色さんに肉食動物を連想した私は、そうそうに校長室を出ることを決める。

「では、これで。色々ありがとうございます」

急いで立ち上がった私は、早足でドアまで進む。

「あ、そうそう。言い忘れていたけど、私は“男”よ」

.....。

「.....えっ」

奇襲と校長（後書き）

自分の小説を読み返していたら、結構書き忘れがありました。お恥ずかしい。

感想・誤字の指摘など待っています。

お気に入り登録が二桁になりました！減らさないように頑張ります。

友達と奇異の目（前書き）

展開遅いですかね？

友達と奇異の目

そんなこんなで4月8日。始業式の日だ。

いつも通りに6時30分に目を覚ました私は顔を洗い、ビニールに包まれた新品の制服を取り出す。制服は男女共にブレザーで、黒を基調としている。赤いラインが襟などに走っていた。

「つと」

ネクタイをキュツと締め、洗面所の鏡で形を確認する。バッチリ決まっていた。

椅子にかけている眼帯を取り、するすると左目を隠す。次に後ろ髪をキツチリとゴムでまとめ、まだ形が崩れていない学生靴を引き寄せる。

準備完了だ。

時計を見ると、まだ15分しか経っていない。でも、計画通りだ。

玄関の方へ歩いて行くと、コンコンと軽いノックがされた。

「黒沼さん？」

「はい。ちょっと待ってね」

ドアの向こう側にいる少女にそう言うと、昨日きたばかりの学生靴を私は履いた。中々履き辛い。

「行つてきます」

誰もいないから、ぼそりと小さく呟く。

ドアをドーンと開けると、そこには月上が太陽の光に反射しながら立っていた。……天使かつ！

私の姿を確認した月上は、ふんわりと微笑んだ。

「おはようございます、黒沼さん。今日も時間ぴったりですね」

「おはよう。じゃあ、行こうか」

私たちは並んで廊下を歩き出す。

私が月上に不審者扱いされてから、ずいぶんと仲良くなった。と言うのも、月上があれから毎日私に会いに来てくれたからだ。それは謝罪からか、それとも転入生のことを心配してくれているのか。どちらにせよ嬉しいものだ。他人から会いに来てくれるなんて、人生でも数回しかない。ちなみに、母さんは別だ。

「すみません。私の時間に合わせてもらって」

月上が申し訳なさそうに私を見た。まるで、飼い主に怒られるような犬だ。

思わず苦笑した私は、気がつくと月上の頭をポンポンと軽く叩いていた。

「別にいいの。私だって早く行かないといけないし、それに月上以外に友達がいらないからね。友達と一緒にいたいのは普通でしょ?」

少し照れくさかった私は視線をそらしたが、視界の端では月上が満面の笑みになったのを確認出来た。

「ありがとうございます」

「んっ」

短く頷いて、月上の頭に乗せていた手を下ろした。

階段をトントントンとリズム良く降り、食堂に入る。まだ時間が早いためか、座っている生徒は少ない。しかし、その誰もが私たち、いや私の方に意識を向けていた。敵意は一つも感じられないが、良い気分はしない。

きゅっ。

そんな私の心情を察したのか、月上は私の手を引くとさっさと食券販売機に進む。

「どれが良いですか?」

「えっ、じゃあAランチで」

「わかりました」

私がお金を渡すと慣れた様子で購入ボタンを押し、出てきた二人分の食券を持ってカウンターに移動する。食券とランチを交換して、

近くにあった空いている席に私たちは座った。

「あまり気を悪くしないでくださいね。みなさん転校生が珍しいだけですから」

目の前に座った月上が、困ったように微笑みながらフォローをする。

確かに、この学園に転校生は珍しい。ただでさえ難関の試験を合格して入学しているのだ。編入試験はその数段は上の試験で、合格した者はかなり優秀でないといけない。それに、それほど優秀なら普通の試験を受験した方が、合格する確率は上がる。よって編入をする利益はあまりなく、転校生はよっぽどの理由がない限りいない。

「気にしていないよ。分かったことだし」

私は何でもないように言うと、ランチにしていたコーンスープを一口飲んだ。

「えっ、黒沼さんFクラスなんですか!？」

朝食を取った私たちは、高校区画の正面玄関の前にいた。そこにはすでにクラス編成が張り出されており、生徒の一人一人が様々な反応をしている。

と言うか。

「月上ってAクラスだったんだね……わっ、しかもSクラスにも入ってる。って同じ2年生だ。敬語使っているから年下と思ってたよ」

風紀委員ってことでそうとうな実力者だとは分かっていたが、まさかSクラスにも入っているなんて。

皇総合魔法学園の高校区画では、A・B・C・D・E・Fまでのクラスがある。振り分ける基準は生徒の成績で、Aに近いほど優秀というわけだ。私が転入するFクラスは最下位。このクラスの他にもSクラスと言う特殊なクラスが存在して、成績上位の生徒や才能のある生徒がそこに所属している。と言っても特殊クラスなので、選択授業の時しか機能しないらしい。なのでSクラスに所属する生徒は、同時に別のクラスに所属していることになる。

私が感心したように月上に視線を移すと、彼女は驚愕した様子で固まっていた。

まあ、書類上では編入試験したことになってるから、それに合格していると言うことは成績が良いと思われるのだらう。現実には試験なんて受けてないし、魔法もほとんど使えないんだけど。

「月上？」

私が月上の目の前で手をひらひら振ると、彼女はハッと我に返る。

「風紀委員会いなくていいの？そのために早起したんでしょ」

「え、いや……でも」

「ほらほら時間ないよ。私も職員室行かないといけないから」

何か言いたげにしている彼女の背を押した。月上は渋々といった感じで、早足に歩いて行った。

月上の姿が見えなくなるまで見送った私は、朝の新鮮な空気を肺に取り込んだ。

「ん~~~~~……っと。仕事の打ち合わせに向かいますか」

友達と奇異の目（後書き）

護衛対象30人ぐらい居るのにまだ一人。
おかしいですね。

たぶん次は月上視点ですかね。たぶんですけど……。

読んでくださってありがとうございます。
感想・誤字の指摘など待ってます。

発見とFクラス（前書き）

最初にお詫びを。

すみません。前回の後書きに『月上視点』って書きましたが、無理でした（汗）。

一応書いたのですが、あまりにもひどかったためボツにしました。もう少しキャラを掘り下げてから掲載しようと思います。

本当にすみませんでした。

発見とFクラス

紅色さんと簡単な打ち合わせをした私は、職員室の中にいた。

職員室はかなりの大きさで、教室を4個ほど繋げた広さだ。少し視線を移せば、名立たる教師が視界に入る。あっ、あの人は護衛対象だ。

「黒沼？」

少し余所見をしていたのが悪かったのか、目の前にいる教師が怪訝そうに呼んでくる。私は仕方なく教師に目を向けた。

——
しおなが
塩長 護。
まてる

それがこの教師の名前だ。十二家の一つ、塩長家の長男で、将来は家督を継ぐことを約束されている。まだ26歳と若く、その整った容貌もあって女子生徒には人気があるらしい。毎年、告白する者もいるとか。体は均等に筋肉が付いており、無駄な脂肪は排除されている。身長もすらりと高く、190センチ前後だろう。この人も護衛対象だ。

「何ですか？」

私はお馴染みの営業スマイルで首を傾げた。その堂々としている態度が良かったのか、塩長は苦笑いをしたが何も注意はしない。

「俺は塩長護。黒沼の担任だ。これからよろしくな」

「はい、よろしくお願いします」

「よし、じゃあ早めに教室に行くか。お前を紹介しないといけないとな」

塩長は「ついて来てくれ」と言うと、職員室を後にする。私もそれに続く。

廊下はまだ生徒で溢れており、喧騒が鼓膜を激しく揺らす。その中の女子生徒の何人かは、塩長のことを熱い目で見つめている。お盛んなことだ。私の方にも視線は来ているが、月上も言っていた通り物珍しただけだろう。転校生で眼帯とくれば、嫌でも目立ってしまう。とっ――。

(……ああ)

廊下の向こう、距離にして80メートルほどだろうか。人と人の間から一瞬だけだったが、訓練されたこの瞳には確かに見えた。

腰まで伸ばした光沢のある黒髪を優雅に揺らし、威風堂々と胸を張って歩いていた。男女問わずその姿を追い掛け、クールにきりつとした表情をぽーっと見ている者もいる。

(大きくなっ たな)

彼女は私の半身だったはずの存在。本来ならば、私も彼女のように優秀になるように運命付けられた存在。

しかし、一方は人生の絶望を、失望を与えられ

一方は人生の希望を、有望を与えられた。

—— 姫島 澪^{みお}。

私と共に生まれ、双子の妹。二卵性双生児のため、顔はあんまり似ていない。正直に言って澪の方が断然綺麗だと思う。ずいぶんと雰囲気や容姿は変わっていたが、それでも一目見ただけで分かったと言つか、彼女も護衛対象なので資料で見っていた。

「おゝい、早くしろ」

苦笑気味の声でしたのでその方向に首を回すと、塩長が階段の所で私を呼んでいた。

「黒沼奏です。よろしくお願いします」

この学園に来てすっかり言い慣れた『よろしくお願いします』を口に出し、軽く頭を下げる。パチパチとそこそこの拍手が鳴った。

「黒沼への質問は後にしてくれよ。今日は連絡事項がかなりあるんだからな。黒沼、あの空いている席に座ってくれ」

塩長がそう言って指し示した席は、一番窓側の列の一番後ろだった。私は「はい」と短く返事をして、机と机の間を移動する。その間も眼帯に生徒たちが注目しているのが確認できた。いい加減ため息をつきそうだったが、息を飲むことでそれを我慢する。

私が席に座ったことを確認した塩長は、プリントを配って今日の全体的な説明を始めた。すでに紅色さんから聞かされていた私にとって、とても退屈な時間だ。

外を見ようかと考えていた時に、唐突に肩をトントンと叩かれた。隣の席を確認すると、ワインレッドの髪をポニーテールにした少女が、勝気そうに口を歪ませながらこちらを見ていた。とてもスタイルがよく……って、この学園スタイル良い人多くない？胸とか、胸とか、胸とかっ……！！

「よっ、転校生。この学園には慣れたかい？」

ハスキーボイスの耳心地が良い声で、何の脈絡もなく質問してくる。

「まあまあ慣れたかな。少なくとも、自己紹介もなしに質問されるぐらいには」

少し皮肉気に言葉を返すと、少女はますます面白そうに表情を変えた。それと共に目をギラギラさせながら顔を近づけてくる。

「ははっ、それもそうだな。オレの名前は城道院じやうだいいん 桜やぐらだ。よろしくな」

桜……容姿と全然会ってない気がする。

「桜……容姿と全然会ってない気がする」

「ははっ！お前はつきり言うな」

「あっ」

しまった。つい考えを口に出してしまっていたようだ。

「気にするな。オレもそう思っているんだからな」

バツが悪そうにしていた私をフォローするように、城道院はからからと豪快に笑う。今、ホームルーム中なんですけど。何で誰も注意しないわけ？塩長ー？

ちなみに城道院も十二家の一角であり、十二家の中でも最大の発言権をもつ家だ。だから本当は城道院桜のことは知っていた。

なんで名門家がFクラスにいるのか疑問を持つ人もいるだろうが、そこはおいおい話していくとしよう。

「オレのことは桜と呼んでくれ。似合っていない名前だろうが、オレは何気に好きなんだ」

「んっ、わかった」

「よし！これからの学園生活は、オレが面倒見てやるからな！」

桜はクラス中に宣言するように声を張り上げると、私に向けて手を差し出してくる。思わず微笑んでしまった私は、その意図を理解し握手をした。

発見とFクラス（後書き）

今回は十二家のオンパレードでした。個人的には桜さんがお気に入りで。

感想・誤字の指摘など待っています。

今回も読んでくださって、ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6199y/>

最弱な魔法使い

2011年12月2日14時54分発行